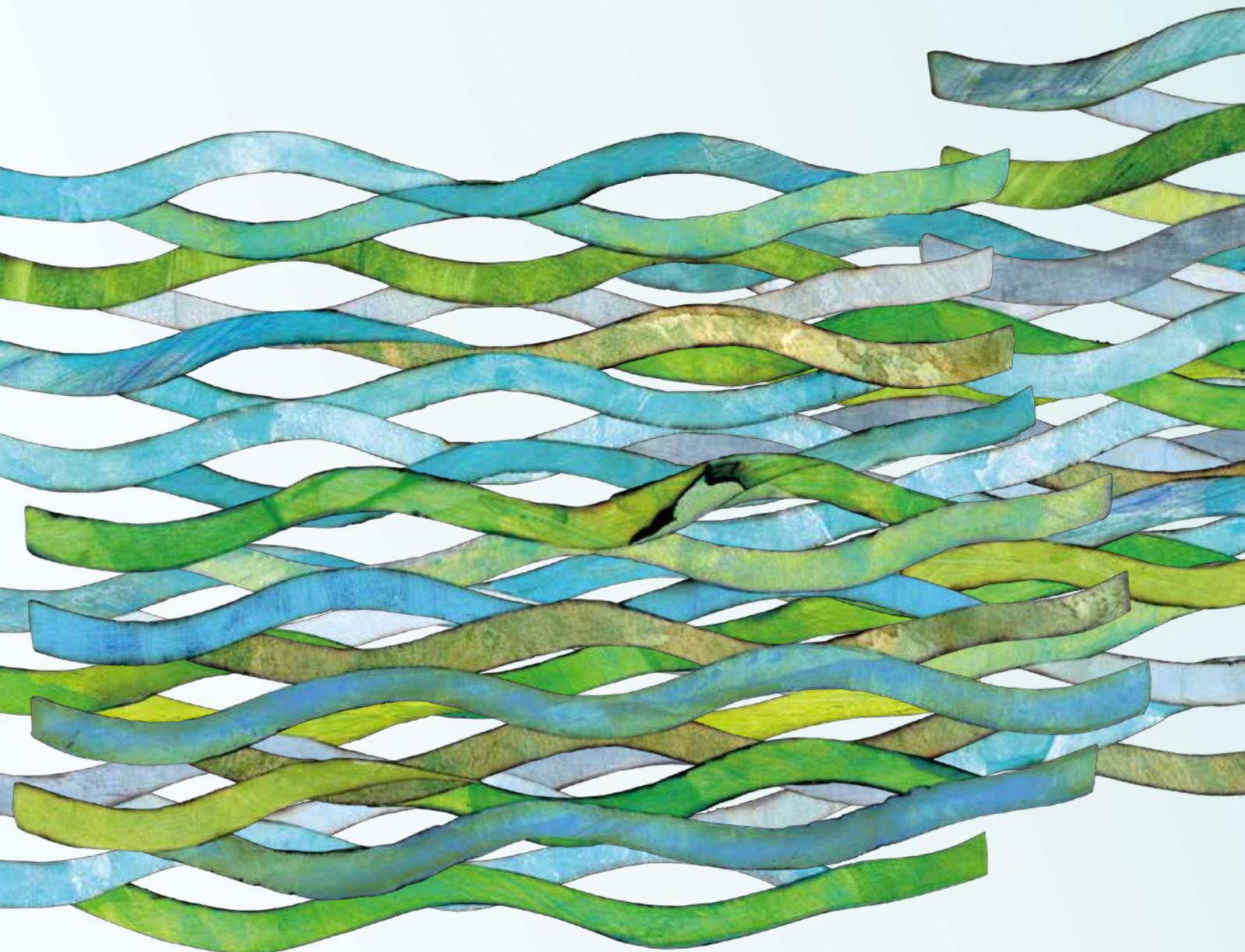
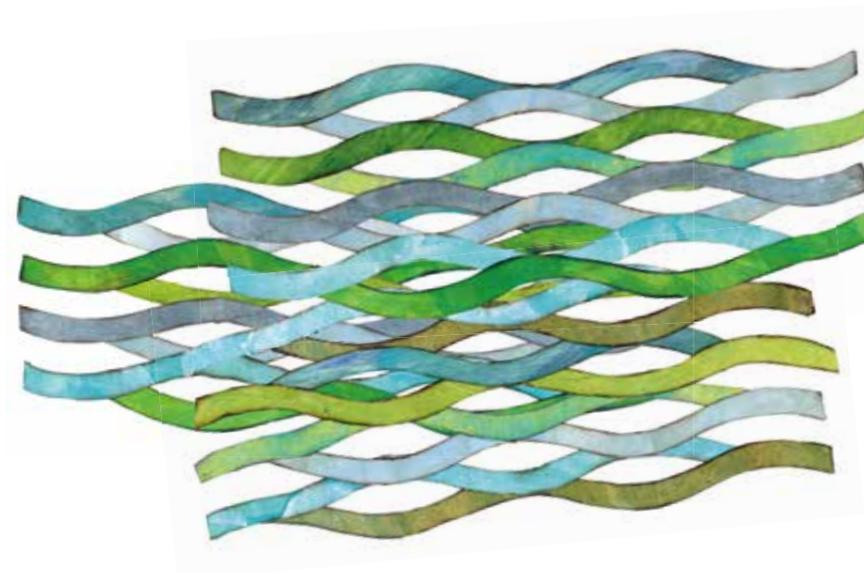


新経営陣からのメッセージ — テクニカルレポート





3 **ぶろろーぐ** ちょっと振り返って / 鈴木 幸一

新経営陣からのメッセージ

- 4 新社長インタビュー
来たるべきネットワーク社会とIIJの役割 / 谷脇 康彦
- 8 新経営陣の紹介 / 村林 聡、北村 公一、渡井 昭久、島上 純一

テクニカルレポート

- 10 **1** コミュニティが支えるインターネット / 松崎 吉伸
- 16 **2** MWCレポート
移動通信業界関係者10万人以上が集う
GSMAのフラッグシップイベント / 佐々木 太志
- 20 **IIJ Research** となりの情シス アンケート 2024年、情シスの皆さんが「頑張ったこと」
- 22 **人と空気とインターネット** 予定調和はつまらない? / 浅羽 登志也
- 24 **新連載 サステナ・レポート** 社員が作るIIJの行動指針「私たちのバックボーン」 / 川上 かをり
- 25 **インターネット・トリビア** 通信の自由化40周年 / 堂前 清隆
- 26 **Information** 表紙の言葉 編集後記
- 27 **車いすフェンシング** 笹島貴明の“Allez(アレ)”! / 笹島 貴明

ぶろろーぐ

ちょっと

振り返って

株式会社インターネットイニシアティブ

代表取締役会長執行役員

鈴木 幸一



おおよそ、規則正しい生活をしていたのは、中学生になった頃までの気がする。子供の頃は典型的な早寝早起き坊やで、夕飯の途中、すでに居眠りが始まってしまったので、お風呂も夕食前に入り、食事も一人早めに食べさせないと、食事中にこっくりこっくりしてしまう。八時には床について、夢のなか。そんな時間に眠ってしまうのだから、朝は四時頃に目覚めて、空腹を訴える。親はたまったものではないので、まだ深い眠りにある家族に迷惑をかけないようと、枕元におにぎりや魔法瓶に入ったお茶が置かれていた。ともかく、たくさん食べて、よく眠る子供だったらしい。幼児の頃からグズることなく、空腹を訴えるほかは、何ら手がかからず、戦後すぐの混乱期、子供の世話まで手がまわらない親や大人にとっては、すでに弁え(おんが)た子だったらしい。それが中学生になった頃から、親にとって手がからないという以外、大きく変わっていった。乱

読する癖がついてしまったことだ。よほどのことがない限り、細かいことに頓着せず、他人と接する際の礼儀以外、過ごし方などは我が子に任せていた親の関心のあり方をいいことに、問題にならない程度に、勝手な生き方を覚えてしまったのである。それが年齢を重ねるごとに、最低限の常識とか、ルールからも外れるようになってしまったようだ。高校生になると、午前、余裕を持って家を出るのだが、高校の裏門から校庭を抜けて、そのまま正門から出てしまう。そして、根岸線の山手駅から電車に乗って、小さな放浪を重ねた。上野公園の博物館や美術館、京橋のフィルムセンター、あるいは図書館で時間をつぶし、授業が終わる時間に合わせて帰宅する。そんなことをして、家族が知らないはずもなかったのだが、学校も家族も緩いというか、わかっていながら度量があった時代の空気に救われて、何とか結果だけは人並みからちょっと外れた程度で済んで、社会人になった。

眠りすぎの幼児から小学校時代、理解には程遠い知識と経験しかないのに、読書に耽った中学から高校時代、すっかりいい加減が身につけてしまった大学から会社勤めの時代、資金もないのにIIJをつくって、インターネット接続事業から巨大な技術革新を志した四〇代半ばから現在——これまでの自分を振り返ると、わけがわからなくなる。ここ二〇年、桜の季節は、仕事の年度末と、上野で始めた「東京・春・音楽祭」が重なり、ひと月以上も眠る時間が少なくなる。年齢を考えた行動をしないと、大変なことになりますよと、言われ続けているのだが、年齢を考え、リスクを考え、常識に則った行動をしていたら、インターネット事業も、世界的になった音楽祭を始めることもできなかった。ひっそりと反論するのだが、「子供の頃からおかしかったのだから」というのが本当のところである。連休が始まるというのに、わずかな時間があれば、眠ってしまう今日この頃である。

新経営陣からの メッセージ

谷脇 康彦 (たにわき やすひこ)

1984年4月郵政省(現 総務省)に入省。同省において郵政大臣秘書官、在米日本大使館ICT政策担当参事官を経て、2013年6月内閣審議官・内閣サイバーセキュリティセンター副センター長、16年6月に総務省情報通信国際戦略局長、17年7月同政策統括官(情報セキュリティ担当)、18年7月同総合通信基盤局長、19年12月同総務審議官(郵政・通信担当)を歴任、21年3月退官。22年1月IIJ入社、同年6月より取締役副社長として経営統括補佐を担当。25年4月より現職。

谷脇康彦が語る

来たるべき ネットワーク社会と IIJの役割

谷脇 康彦

株式会社インターネットイニシアティブ
代表取締役社長執行役員
Co-CEO&COO



——最初にデジタル経済および市場の分析からうかがいたいと思います。現状はコロナ禍「以後」の流れのなかにありますが、コロナ禍「以前」と比較すると、どんな変化があったのでしょうか？ また、世界的に見た時、日本のデジタル化はどの段階にありますか？

谷脇 もともとインターネットは時間と距離の制約を越えるという点で「20世紀最大の発明」の一つと言われていますが、コロナ禍を機にBCP(事業継続性)の面からインターネットは業務上、不可欠であるとの認識が広がりました。世界的に見ると、日本におけるデジタル化はコスト削減や業務効率化を目的とするものが主流でしたが、欧米ではビジネスに付加価値をもたらしたり、新たな事業創出が志向されてきました。今後、日本のデジタル化は、既存の事業モデルをより魅力あるものにしていくために、デジタル技術を具体的にどう活用していくのかというステージに移りつつあると感じています。

——日本企業におけるデジタル化が新たな価値創造につながっていない要因は、どのあたりにあるのでしょうか？

谷脇 欧米の人は「失敗してもやり直せばいい」と考える傾向が強い一方、日本人はとても真面目です。加えて「ものづくり大国ニッポン」という意識からなかなか抜け出せなくて、パッケージ化されたサービスを使いこなす「モノからサービスへ」という発想転換が根づいていないのかもしれないですね。

——企業側からすると、既成のサービスだと、自分たちの

新経営陣からの メッセージ

課題を解決できないというか、そこまでの期待感が持てていないのではないのでしょうか？

谷脇 それはあると思います。サプライヤーの立場としては「どんな課題がありますか？」と問いかけながら、「それはこういうサービスがありますよ」といった課題解決に直結した対応が求められているのだと思います。

そこで考えられるのは「個別化」「最適化」「自動化」という三つのキーワードです。まず「個別化」ですが、これは個々のニーズに適したサービス提供です。喩えると、服薬に際しては「大人・一回三錠」などと指定されていますが、そのあたりも体型や症状に合わせて柔軟に調整していくといった内容です。次に「最適化」とは、これからは膨大なデータをもとに、より細かいニーズを把握できるようになります。そこで、農業の作付け時などに粒度の高いデータを参照すれば、収穫増が見込めるといった活用方法です。そして「自動化」は、AIを使うことでプログラミングを自動化できたり、製造工程の一部をAIに委ねるといった用途になります。

日本ではこれから少子化が進み、人口も減っていくなかで、「これら「個別化」「最適化」「自動化」が不可欠になってきます。喫緊の課題を解決していくうえで、IIJとしても時宜を得たサービスを提案していかなければならないと感じています。

事業の方向性

——次にIIJの事業概要についてうかがいたいと思います。既存のコアビジネスに関しては好調な業績が続いていますが、ここはテコ入れをしていくなど、改善すべきポイントがありますか？

谷脇 IIJはインターネット草創期からサービスを提供

しており、社員の七割がエンジニアという高い技術力を持った企業なので、この特長を引き続き強化していくことが大前提になります。インターネットは枯れた技術ではなく、どんどん進化しているので、最先端の成果を吸収しながら、それらをお客さまにわかりやすいかたちで提供していくことが求められています。

さらに「サービスインテグレーション」と呼ばれる分野では、近年、ネットワーク系サービスとソリューション系サービスの一体化が進んでいます。IIJはソリューション系とネットワーク系のサービスをワンストップで提供できるので、この強みを活かした新しいサービスを開発していきたいです。

そこでもやはり安定したネットワークが基盤になるわけですが、かつては固定型の有線系ネットワークとモバイルを主とした無線系が分かれていたのが、近年の利活用では両者が渾然一体となってきました。これはつまり、多種多様なものがネットワークにつながり、ネットワークとソリューションが分けられなくなっていて、デジタル化を突き詰めていくと、旧来の境界がなくなっていくことだと思っています。

IIJのポートフォリオには、モバイル系/固定系やネットワーク系/ソリューション系といった領域がすでに組み込まれているので、今後はこうしたアドバンテージを活かして、お客さまのニーズに合わせてカスタマイズ可能なサービスを提供していきたいと考えています。

——新規ビジネスに関して注目している分野などはありますか？

谷脇 ネットワーク社会ではデータ活用のあり方が非常に重要になっており、近年話題の生成AIもデータ流通・処

理の加速化装置という見方もできます。だとすると、データを連携したり、つなぎ合わせたりして新しい価値を生み出す「データ連携ビジネス」には大きな伸びしろがあります。

IIJはすでにさまざまなシステム間のデータ連携を容易にする「IIJクラウドデータプラットフォームサービス」を提供していますが、こういったサービスをさらに拡充していきたいです。

それと並行して注力すべき分野が「セキュリティ」です。全てのものがネットワークにつながっていると、あらゆる領域でセキュリティを考慮する必要があります。また、これまでセキュリティというと、データを漏えいさせない「コンプライドシヤリティ(機密性)の確保」が重視されてきましたが、今後はデータの改ざんを防止する「インテグリティ(完全性)の維持」も大切になってきます。

さらに、経営層のセキュリティに関する認識は日本企業にもかなり浸透してきましたが、まだ「セキュリティコスト」と考える向きもあります。我々としても、セキュリティをしっかりと維持することが企業価値の向上につながるという「セキュリティ投資」という発想を促す施策を検討していきたいと思っています。

加えて、二〇五〇年頃まで日本は世界でもっとも高齢化が進んだ国であり続けます。ただ、その後は中国や韓国などアジアの国がどんどん追いついてきて、やがて日本を追い抜いていきます。これは見方を変ええると、日本はこの状況を約二〇年、先取りしているということであり、高齢化に付随する諸課題に対し我々がソリューションを実用化できれば、それがアジアのマーケットでも歓迎されるということです。日本が特異な環境にあるのではなく、前向きな意味で「課題先進国」なのだという意識で臨めばいいのではないのでしょうか。

——将来の課題に対応できるソリューションを開発してお

けば、それが活かされる時代が来るということですね？

谷脇 先行者としてのベネフィットは必ずあります。そういう意味でも、アジアを含むグローバル市場の開拓は必須で、海外の成長をIIJの成長として取り込んでいけるようにしたい。それは単に収益を上げるというだけでなく、各国・各地域の課題を我々の技術提供を通して、また必要とあらば現地企業ともパートナーシップを結びながら、社会貢献できる企業を目指していきたいです。

若い世代へのメッセージ

——近年、IT業界では「エンジニア不足」が課題になっていますが、これからのネットワーク社会を支えていく次世代のエンジニアにメッセージをいただけますか。

谷脇 若手に対する期待はすごく大きくて、優秀なエンジニアも大勢いるのですが、みんな真面目なんですよね。彼らを見ていて「もっと失敗を経験してほしい！」と思うのです。若い頃は私もいろいろなヤンチャもしましたが(笑)、それらはあとで必ず教訓になって返ってきます。

私も三〇代半ばくらいから、霞が関の役所であったり、民間企業の方ですとか、あるいはまったく別の業界の人たちなど、いろんなところから声をかけていただき、勉強会などに参加してきました。すると、そこでの経験が後々すごく役に立ったりするのです。若いうちは組織の枠に囚われる必要などまったくなく、自分が正しいと信じてることをやってみてほしい。万が一、失敗しても、その責任は社長が取ります！だから、どんどん新しいことにチャレンジしてください。

——たいへん心強いお言葉をありがとうございました！



「インターネットは枯れた技術ではなく、どんどん進化しているので、最先端の成果を吸収しながら、それらをお客さまにわかりやすいかたちで提供していくことが求められています。」

新経営陣からの メッセージ



村林 聡
I I J 取締役副社長執行役員

安心・安全を安定的に ご利用いただくために

リスクマネジメント本部、管理本部を所管します。よろしくお願いたします。I I Jはデータセンター、ネットワーク、セキュリティなどのサービスやインテグレーションを多くのお客さまにご利用いただいています。I I Jの提供するデジタルインフラは今や企業の事業活動の根幹をなし、障害が発生すると甚大な影響を及ぼします。障害の未然防止や影響の極小化のためには、開発者の高い技術力と品質管理などの高いマネジメント力の両輪が重要です。リスクマネジメント本部は3ラインディフェンスの2線の役割として、データガバナンス、品質管理、障害管理、情報セキュリティ管理のフレームワークを高度化し、1線の技術者をサポートしていきます。そして管理本部を中心に、プロ人材確保・育成に注力します。これらの活動を通じ、お客さまに安心して安全なシステムを安定的にご利用いただき、お客さまとI I J双方の信頼残高増に努めてまいります。

村林 聡 (むらばやしさとし)

—
分掌：管理本部、リスクマネジメント本部所管、(株)ディーカレットホールディングス代表取締役社長

—
1981年4月、株式会社三和銀行(現・株式会社三菱UFJ銀行)に入行。同行において国内支店、システム部門に従事。2009年、株式会社三菱東京UFJ銀行執行役員システム部長を経て、15年6月、同専務取締役コーポレートサービス長兼CIO。17年6月、三菱UFJリサーチ&コンサルティング代表取締役社長。20年4月、ディーカレット社外取締役。21年6月、I I J入社、取締役副社長として経営統括補佐を担当、ディーカレットホールディングス代表取締役社長、およびディーカレットDCP代表取締役会長兼社長を兼務。



北村 公一
I I J 取締役副社長執行役員

ビジネスを支える プラットフォーム

新体制においても、I I Jが得意とする「お客さま企業のOA環境をセキュアかつ快適に保つITプラットフォームDWP(Digital Work Place)」の提供と、DWPをさらに高度化するための新サービスのリリースおよび安定運用が最大の営業ミッションになります。加えて、DWPを大幅に拡張し、「お客さま企業のビジネス拡大や新規ビジネスの創出を実現するためのDX(Digital Transformation)」をIT面で支えるDXP(Digital Transformation Platform)の展開を現中期(FY2024~FY2026)の成長戦略の中核に据え、提供を開始しました。実現にあたっては、経験豊富なサービスプロバイダ事業と、お客さま企業が個別に必要な機能やサービスを提供するシステムインテグレーション事業を融合させ、短期かつ低コストで要件を達成するシステムを構築・運用できるI I J独自のサービスインテグレーション事業の加速に取り組みます。

北村 公一 (きたむら こういち)

—
分掌：エンタープライズ営業本部、金融営業本部、公共営業本部、アライアンス営業本部、インテグレーション事業本部、グローバル事業本部所管、マーケティング統括本部共同所管、エンタープライズ営業本部長

—
1978年、新日本製鐵株式会社(現・日本製鉄株式会社)に入社。研究開発本部、エレクトロニクス・情報通信事業本部に勤務後、2002年4月、新日鉄ソリューションズ株式会社に転出。同社にて、04年6月より取締役、09年9月より常務取締役、12年4月より専務取締役、14年4月より取締役副社長執行役員を歴任。この間、産業(製造業)部門、流通部門、鉄鋼部門、テレコム部門、公共部門等を担当するとともに、海外現法、営業統括、ソリューション企画・コンサルティング、IoT等も管掌。19年8月、同社を退職。19年9月よりI I J顧問、21年6月より専務取締役に就任。ビジネスユニット長を所管。24年4月に取締役専務執行役員に就任。25年4月より現職。



島上 純一
I I J 取締役副社長執行役員
C T O

インターネットの新たな可能性

1990年代から始まったインターネットの社会実装の歴史は、1992年に創業したI I Jの歴史そのものでもあります。さまざまな技術の進化により、インターネットによって大量の情報を容易に伝送・蓄積・処理することが可能となりました。インターネットは新たなイノベーションが生まれる場であり、社会に欠かせないインフラとなっています。インターネットが社会で持続的に有効活用されるためには、インターネット自体の継続的な改善および利用上の技術的・制度的対策が必要不可欠です。私たちはこれからもインターネットの新たな可能性を追究し、技術に裏打ちされた革新的なサービスを提供することで、社会のイノベーションを推進していきます。

島上 純一 (しまがみ じゅんいち)

—
分掌：CTO、ネットワークサービス事業本部、モバイルサービス事業本部所管、マーケティング統括本部共同所管

—
1990年、株式会社野村総合研究所に入社。同社にて企業ネットワークの構築を担当した後、95年に社内ベンチャー(現・NRIセキュアテクノロジーズ)に参画し、セキュアなインターネット接続環境を企業へ提供するサービスを立ち上げた。96年、I I J入社。I I JやA-Bone(日本を含むアジア太平洋地域の各国を相互に接続する国際インターネット回線網のバックボーンネットワーク)のインフラ構築・運用に従事。2015年より取締役CTO(最高技術責任者)として、ネットワークサービス、クラウド、セキュリティなど技術全般を統括。20年より常務取締役CTO。25年4月より現職。



渡井 昭久
I I J 取締役副社長執行役員
C F O

事業投資の方針・運営基盤の強化

本年4月から新経営体制となりましたが、中長期の経営ビジョン、中期事業計画と業績ターゲットやキャピタルアロケーション等は、従前から変更ございません。引き続き、ネットワークやシステム領域において、高い信頼性と付加価値を重視し、サービス開発やネットワークインフラ拡張等の事業投資を継続していくと共に、サービスインテグレーションやその先のフルアウトソース等の事業モデルにおいて、それらを複合したかたちで最適に提供してまいります。また、データ流通の普及等に向けて、新たな事業領域や付加価値も創出してまいります。これらの根幹としては、人的資本の拡充が重要であり、人材獲得や育成を中心に、事業成長を司る事業運営基盤の強化に努めてまいります。

渡井 昭久 (わたい あきひさ)

—
分掌：CFO、経営戦略本部、財務本部所管、経営戦略本部長、財務本部長

—
1989年、株式会社住友銀行に入行。同行において国内支店渉外、海外支店業務、本店システム企画を経て、96年、I I Jに出向。社長室長として資本政策・提携等、社長特命案件に従事。2000年、I I J入社。04年より取締役CFOとしてI I Jグループ全体の業績・財務管理、IR活動を統括。21年4月より専務取締役CFO。25年4月より現職。

コミュニティが支える インターネット

インターネットの普及・発展の裏では、

ネットワーク運用者のコミュニティ (Network Operators Group : NOG) が技術面を支えると同時に、連携および協調を実現する場となってきた。日本では、日本ネットワーク・オペレーターズ・グループ (JANOG) をはじめ、TDNOG、ENOG、ChuNOG、NaniwaNOG、3SNOG、QUNOGなどが活動している。本稿では、こうしたNOGについて解説したうえで、各コミュニティがインターネットの進化をどう支えてきたのを見ながら、今後の展望について考えてみたい。

IIJ ネットワークサービス事業本部 基盤エンジニアリング本部
運用技術部 技術開発課 プリンシパルエンジニア
APNIC Executive Council, Treasurer

松崎 吉伸



初期のコミュニティ

世界で最初にNOGとして活動を始めたのは、北米地域のNorth American Network Operators' Group (NANOG)です。NANOGの起源は、米国の学術ネットワークであるNational Science Foundation Network (NSFNET)のRegional-Techsミーティングに遡ります。これはNSFNETの運用に関わる技術者の会合であり、NSFNETの運用を担っていたMerit社によって、一九八七年から一九九四年までNational Science Foundation (NSF)からの資金で開催されてきました。その後、商用インターネットの接続サービスが普及し始め、NSFは公的資金に頼らなくてもインターネットが発展していける段階になったと判断しました。これを受けてMerit社は、Regional-Techsに代わる会合として、商用ネットワークなど新たなインターネットの形態を念頭に、ネットワーク運用に携わる幅広い関係者が集まり、参加者からの参加費収入により独立採算運営できるモデルを検討し、一九九四年にNANOGを設立しました。初期のNANOGはカンファレンスのみの構成でしたが、一九九七年頃からは

チュートリアルや運用に関わるソフトウェアの実演など、教育的要素を含んだ会合に発展しました。また、多くのネットワーク運用者が集う会合になったため、相互接続交渉を行なう場としても認知されていきました。NANOGでは参加者の協力的活動を維持しつつ、協賛各社からどのように支援を受けるのかを課題としていました。と言うのは、協賛による支援金が会合開催に必要な経費の負担を減らす一方、商業的活動が目立って、ネットワーク運用者の会合がただの展示会になってしまうのでは……という懸念があったためです。そのためNANOGでは、協賛専用のブースやセッション以外では宣伝行為を禁止する方針を打ち出しました。これにより協賛各社から支援を受けつつ、参加者が発表し議論できる場を守る体制が確立しました。この方針は世界の多くのNOGにも受け継がれています。

ワークショップを開催するなど、地域内でネットワーク運用に関する教育機会を提供する場にもなっています。APRICOOTに刺激を受けた参加者がそれぞれの国や地域でNOGを設立する動きも活発になりました。例えば、南アジアでは「小さなAPRICOOT」を目指して、South Asia Network Operators Group (SANOG)が設立され、さらに南アジアの各国にもNOGが立ち上がっています。こうしたNOGは今や世界中にあります。特にアジア太平洋地域やヨーロッパで独自のNOGが多数設立されています。

NOGの概要・運営形態

NOGはネットワーク運用者、技術者、専門家などで構成される緩やかなグループで、参加者が率直に語り合える場を提供しています。明確なNOGの定義はありませんが、その根幹をなすのは、NANOGの活動に由来するNOGの理念、つまり「ネットワーク運用者の協調と共助がネットワーク運用には必要だ」という価値観をコアメソッドとして共有し、多様な参加者が活動しているグループだと言えます。

NOGは各地域の事情に応じて活動しています。多くの場合、運用者の交

流、運用知見や技術情報の共有、課題の議論などをおもな活動内容としています。NOGによつては、ネットワーク事業者以外にも、製品ベンダ、教育機関、研究開発機関、法執行機関、規制機関といった組織から参加している場合もあり、NOGは多層的な広がりを持つコミュニティになっています。これは、参加者各自が異なる目的を持っている実態を示唆しており、NOGの緩やかな枠組みや開かれた雰囲気があるのを可能にしています。

NOGの運営形態はそれぞれ異なっています。組織体制に関しては、会合を開催するためのさまざまな契約、手続き、入出金の管理などを考慮して法人格を設立して銀行口座を開設しているNOGもあります。法人格をもつ既存の業界団体などを事務局としているNOGや、運営管理上の手間を減らすために、あえて単なるグループとしてコミュニティを維持しているNOGもあります。会合の規模もそれぞれ異なっており、だいたい五〇〜二〇〇名程度の参加者を集めています。より大規模なNOGもあります。開催にかかる経費に応じて、参加費を徴収するNOGや、協賛からの支援金で賄っているNOGもあります。一方、NOGの多くの活動は、組織体制にかかわ

インターネット運用のむずかしさ

グローバルな技術であるインターネットは、接続性さえあれば世界のどこでも同じサービスやアプリケーションを利用できます。最近では広帯域かつ安定した接続を前提としたサービスも増えており、世界中の利用者から同程度の品質や性能が求められています。低品質の接続では利用できるサービスや用途が制限され、必要に応えることができません。そのため接続手段もさらに広帯域なサービスへと置き換えが進む一方、扱うデータ量も増え続けているため、ネットワークの増強も必須になっています。一方、こうしたインターネット利用の高まりに乗じて、これを悪用しようとする活動も多く観測されるようになっており、ネットワークを安定的に稼働させるうえで「セキュリティ」が非常に重要になっています。NOGでも新たな脅威や状況の変化に

応じて継続的に運用を更新していく必要が生じています。

インターネットは多くの自律的なネットワークが相互接続して成り立っているため、協調的な運用を実施していく必要があります。例えば、IPv6導入などは世界中のネットワークが主体的に取り組むべき課題とされているほか、インターネットの経路制御に関してより円滑な運用のために、各ネットワークでの対応が求められる施策もあります。例えば、Resource Public Key Infrastructure (RPKI) では、経路情報（正当性を確認し、経路制御ファイル）を精緻に運用できるようになっています。IPアドレスやAS番号など番号資源の保持者には、それぞれの経路制御運用に応じて必要となるRPKIの電子証明書の発行が求められています。これにより、各ネットワークで電子証明書にもとづいて経路制御が可能になります。ある種の攻撃は送信元IPアドレスを詐称することで成り立っており、詐称防止が対策になることが知られています。つまり、こうした攻撃を根絶するには、世界中のネットワークで送信元IPアドレス詐称の防止策が必要です。

各ネットワークに求められる施策は多岐にわたりますが、それぞれのネットワークは独立した運用ポリシーを持つため、課題への対応もネットワークごとに異なります。推奨される運用といても強制ではなく、実施の判断は各ネットワークに委ねられているのです。もちろん、インターネット接続サービスを提供する際の規約で一定の対策が求められる場合もあります。例えば、消費者向けのインターネット接続サービスにおいて禁止事項が定められ、違反したらサービスを停止するといった文言がある場合があります。しかし、相互接続しているネットワークでは、お互いに自律的にネットワークを管理

トワークは独立した運用ポリシーを持つため、課題への対応もネットワークごとに異なります。推奨される運用といても強制ではなく、実施の判断は各ネットワークに委ねられているのです。もちろん、インターネット接続サービスを提供する際の規約で一定の対策が求められる場合もあります。例えば、消費者向けのインターネット接続サービスにおいて禁止事項が定められ、違反したらサービスを停止するといった文言がある場合があります。しかし、相互接続しているネットワークでは、お互いに自律的にネットワークを管理

する能力を持つていることが前提になっているため、過度に踏み込んだ意図はされていないか、仮にあったとしても厳密に適用されることは稀です。それぞれのネットワークでは隣接するネットワークとの関係やコミュニティからの情報などをもとに課題を取捨選択あるいは優先付けして、対応を行っています。当然、課題を放置するネットワークが増えたとインターネット全体の運用に支障をきたすため、協調的な運用が求められています。

整理してみました（左記）。

NOGの役割

NOGはインターネットの安定と発展を支える多面的な役割を果たしてきました。その活動は、技術的基盤の強化から社会的課題の解決まで幅広く、いずれも重要な意義を担っています。ベストプラクティスの共有により、運用の効率化・標準化を進め、障害時には迅速な情報共有で被害の軽減に努めています。また、新技術の普及を支援することで、業界全体の技術的進化を

NOG (Network Operators Group) の役割

1 ベストカレントプラクティスの確立と普及

インターネットの運用に関するベストカレントプラクティスに関しては、Internet Engineering Task Force (IETF) で策定される Best Current Practice (BCP) シリーズがよく参照されます。これはインターネット関連の重要な実践についての文章で、送信元IPアドレスの詐称を防ぐ手法を記述したBCP38/BCP84などが有名です。BCPの文章は比較的長期にわたって適用可能な内容になっており、NOGでは策定された実践事例や導入状況を共有し、業界全体の課題解決に役立てています。また、より身近な運用やコミュニティに共通する課題については、独自に文章を策定したり、議論や交流を経てベストカレントプラクティスを共通認識として持つ場合もあります。このようにネットワーク運用者が最先端の知識に触れ、各々のネットワークで実践することで、日々の運用環境が構築されています。

4 人的ネットワークの構築と信頼形成

NOGが主催する会合や懇親会は、ネットワーク運用者同士が交流し、人的ネットワークを構築する貴重な機会になっています。直接会って話をすることで、各々が関わるプロジェクトの推進につながったり、新たな協力関係に発展することもあります。また、ネットワーク間の相互接続交渉も活発に行なわれており、会合で相互接続交渉用のミーティング調整ツールや専用のスペースが用意されることもあります。交流の場をもうけることで互いの運用を理解し、相互接続の条件や時期を調整して、安定的なネットワーク環境の構築に役立っています。さらに、人的ネットワークの構築が、事業者や地域の壁を越えた信頼関係を築き、障害やインシデント発生時の情報共有および迅速な対応を可能にします。

2 重大障害時の情報共有と対応支援

NOGはインターネット上で重大な障害が発生した際に情報を共有し、迅速な対応を支援する役割を担っています。大規模なネットワーク障害が発生すると、その影響は個々のネットワークを超え、地域全体やグローバルネットワークに及びます。過去には、多くのネットワークに影響するようなDDoS攻撃や経路障害が発生した際、NOGの参加者が原因分析や情報共有を迅速に行ない、素早い対応や被害の軽減につながったケースもありました。また、障害発生時の復旧作業を効率的に進めるための手法やツールも共有されています。さらにNOGでは、障害から得た教訓を活かして、再発防止のためのガイドラインやベストプラクティスを策定する活動も行なっています。

5 技術者の育成とコミュニティ継承

インターネットの運用に関する知識・経験には、属人的かつ暗黙知的なものが多々あります。しかし、インターネットの発展を持続させるためには、知識や知見を次世代の技術者に伝え、コミュニティを継承していくことが不可欠です。NOGでは、会合での発表や若手技術者向けのトレーニングを通じて、実践的なスキルや知識を提供しています。NOGによっては、ワークショップの講師陣に若手技術者をアシスタントとして迎え、次世代の講師を育成しているところもあります。発展途上国などでは熟練技術者が国外などに転職してしまう人材流動が多く、技術者の育成は大きな課題です。コミュニティとして技術者の育成に取り組むことで、効果的な人材育成が期待できます。また、若手技術者同士のつながりが新たなコミュニティを形成し、次のNOG運営者の育成にも寄与しています。

3 新技術への対応と普及支援

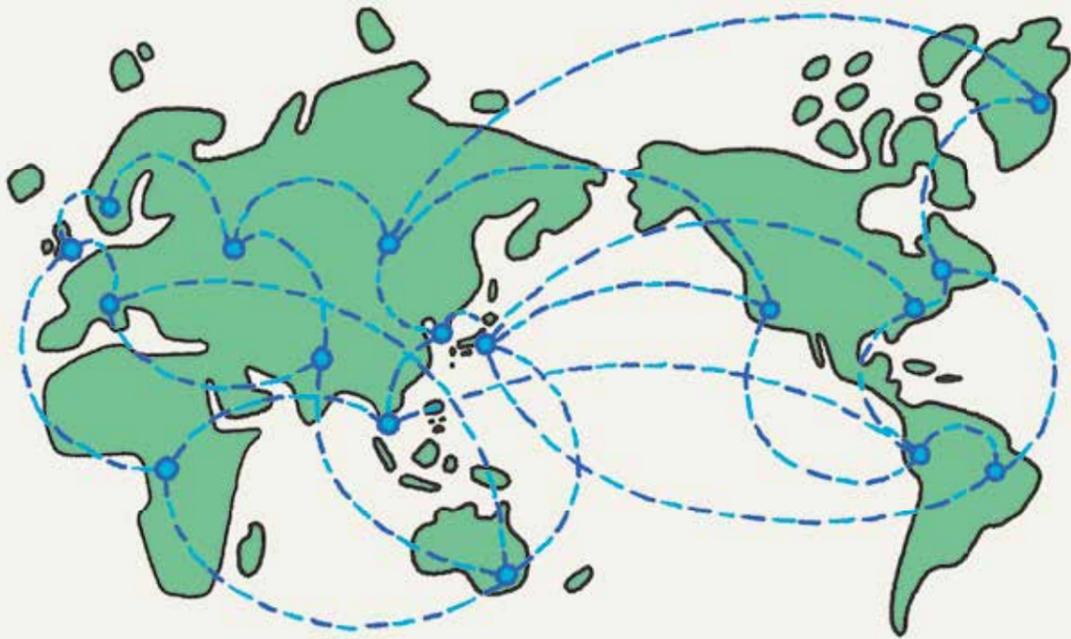
重要な新技術を議論し、導入に関する懸念や実装上の課題を共有することで、技術の社会実装を加速させる役割をNOGは担っています。また、実際に導入した現場における具体的な課題や運用上の知見を、IETFなどの標準化団体や製品ベンダにフィードバックすることで、技術仕様の改善を促しています。例えば、IPv6、DNSSEC、RPKIなどは多くのNOGで議論されています。こうした技術のチュートリアルや、実際に設定して動作させてみるワークショップを実施しているNOGもあります。NOGを介して、他のネットワークにおける導入手法や活用事例が共有されることで、初期導入時のリスクを軽減できるほか、後発の事業者の導入促進にもつながっています。

6 地域的な課題の抽出と解決への貢献

NOGでの議論を通じて、地域に特有な課題が判明することがあります。これは地政学的な課題であったり、入手できる機器や利用者の傾向・規制など、さまざまな要素が考えられます。独自の課題を解決するために、NOGは各地域に即した活動を展開しています。例えば、インターネット基盤が整備されていない地域では、技術教育を目的としたワークショップを開催し、ネットワーク運用スキルの向上を支援しています。また、大学や政府系機関でインターネット技術の講習会を開催しているNOGもあります。こうした活動により「デジタルデバイド（情報格差）」が解消され、インターネットを通じた教育や経済発展の基盤が培われています。さらに、各地域の成功事例を参照することで、同様の課題を抱える他の地域が効率的な解決策を導入しやすくなり、グローバルな問題解決へ導く契機になっています。

JANOGの活動

日本ではJANOGが一九九七年に



ているのです。

これからのNOG

NOGはネットワークの運用に携わる現場の知識や経験を広く共有するためのコミュニティとして、長きにわたる重要な役割を担ってきました。単なる情報交換や発表の場にとどまらず、ネットワーク運用の第一線にいる技術者が自身の知見を持ち寄り、技術的課題に真摯に向き合い、時には社会的な課題に対しても積極的に関与する場として機能してきました。このような活動を通じて、NOGは実践的な知識や経験が蓄積された“知の集積地”としての性格を持つに至りました。個々の知見が相互に補充されることで、参加者一人ひとりのスキルが高まると同時に、インターネット全体の品質や安定性の向上にもつながっています。

NOGのもう一つの特徴は、業種や企業の壁を越えて、多様な運用者がつながり、対等な立場で経験を共有している点です。通信事業者、教育機関、クラウドベンダ、中小企業のIT担当者など、さまざまなバックグラウンドを持つ技術者が集まり、それぞれの視点や立場から課題を持ち寄ること、単一組織だけでは得られない

広範な視野と発見がもたらされています。ビジネス上では競合する事業者同士でも、インターネットにおいては相互依存の関係にあるため、協力的な運用なしにはインターネットの発展は望めません。

インターネットの運用は協調を重んじる文化を基盤としており、その姿勢はインターネットそのものに備わっている“自律・分散・協調”を主とした仕組み・価値観に通底しています。インターネットは特定の誰かによって統制されるのではなく、多数の独立した主体が協力し合うことで成り立っています。NOGはまさに“自律・分散・協調”の精神を体現する場であり、インターネットを円滑に運用するうえで欠かせない存在となっています。

インターネットは今後もさらなる技術革新の波を受けて、ますます複雑で高度なシステムへと進化していくと考えられます。利活用の範囲もこれまで以上に広がり、私たちの社会や生活のあらゆる場面に深く浸透していくでしょう。クラウドコンピューティング、IoT、AIといった新しい技術が急速に普及しつつある今、ネットワークが担う役割や利用者の期待も変わりつつあります。

新たな技術の登場にともない、ネットワーク運用に求められる知識やスキル

発足して以来、おおむね年に二回の頻度でミーティングを開催するなど活発に活動しています。初回のミーティング参加者は一三〇名ほどでしたが、徐々に参加者が増え、二〇一八年には一〇〇〇名、(コロナ禍の一時期はオンラインでの開催となったものの)二〇二三年には二〇〇〇名、二〇二四年には三〇〇〇名もの現地参加者が集う、世界的にも大きなミーティングになっています。近年では、北米のNANOGとヨーロッパのRIPEが七〇〇名程度、アジア太平洋地域のAPRICO Tで九〇〇名程度なので、JANOGの規模は飛び抜けて大きいと言えます。プログラムも充実しており、現在は三日にわたり複数のセッションが同時並行で開催されるほか、特定のトピックに興味のある人が集まって議論するBirds of a Feather (BoF) も数多く開かれています。

プログラム構成や内容については、ミーティングごとにボランティアによって組成されるミーティング実行委員会が工夫を凝らしたプログラムを検討しており、ミーティングホストは必要な施設や設備を準備するだけで、内容にはほぼ関与しません。このように異なる背景を持つ多くの人が協力してJANOGに関わることで、広がりのあるコミュニティが形成されています。

JANOGのミーティングの特徴として、発表後の議論をとても大切にしている点が挙げられます。これは、会合が単に情報発信の場として終わるのではなく、参加者全員が主体的に意見を交換し、知識や経験を共有することを目的としているためです。他のNOGでも発表後に質疑応答の時間が設けられていますが、たいてい五分程度であるのに対し、JANOGでは一つの発表に対する議論に三〇分以上も費やされることがあります。

インターネット運用という技術的かつ実践的な分野では、理論だけでなく、現場での経験にもとづく実践的な知見が重要です。よって、JANOGミーティングでは発表以上に、発表後のディスカッションが重視され、参加者が自らの課題や疑問を積極的に公開し、解決策をともに模索する場が設けられ

ルセット、さらには対応力も、これまでに以上に柔軟で幅広いものが必要になっています。ネットワークの運用者は、単なる障害対応だけでなく、セキュリティの確保、パフォーマンスの最適化、予防的な保守、そして異なる技術分野との連携など、総合的かつ複層的な視点が欠かせない時代に直面しています。

しかし、こうした変化に個々の技術者や企業が単独で対応するのは、時間的・人的・経済的な面で限界があります。多様かつ急速に変化する技術に追いつき、適切に運用していくには、組織の枠を越えた協力と知見の共有が不可欠なのです。だからこそ、NOGのようなコミュニティが果たす役割は、これまで以上に重要性を増しています。共通の課題に対する情報共有、成功・

失敗からの学び、そして尊重し合いながらの率直な議論が、時代の変化に柔軟に対応していくための基盤となります。“自律・分散・協調”を基本とした、持続的な学びと実践のコミュニティが、今後もインターネットを安定的に支え続ける場となるでしょう。

IIJは今年の夏、島根県松江市で開催予定のJANOG56のミーティングホストを務めます。これは、二〇一八年一月に広島で開催されたJANOG41以来、二回目のミーティングホストになります。JANOGミーティングでの多くの実りある議論を通じて、より良いインターネット運用に貢献できるよう頑張りますので、どうぞよろしく願います。

JANOG56 Meeting in Matsue IIJホストで開催

2025年夏、島根県松江市でJANOG56 Meetingが開催されます。本ミーティングは、IIJがホストとなり、来場者の皆さまをお迎えいたします。

開催日程
2025年7月30日～8月1日

会場 (本会議)
島根県松江市くびきメッセ

主催
日本ネットワークオペレーターズグループ

ホスト
株式会社インターネットイニシアティブ

最新情報はWEBページを参照ください。
<https://www.janog.gr.jp/>



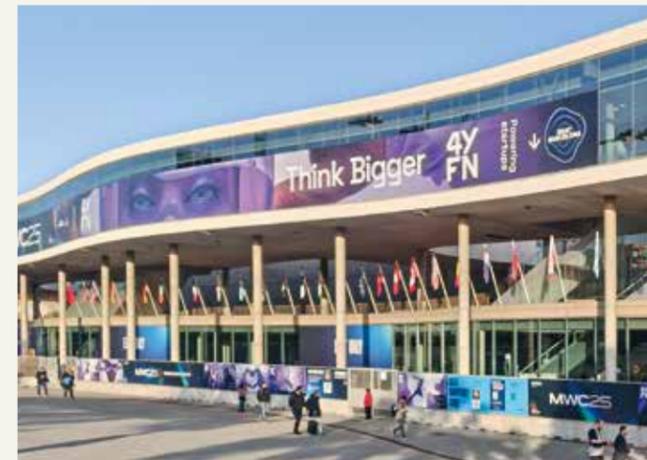
MWCレポート

移动通信業界関係者10万人以上が集う GSMAのフラッグシップイベント

毎年スペイン・バルセロナで開催されているMWCバルセロナには世界中から業界関係者が集結し、市場全体を睨んだ最先端のやり取りがなされる。今回は長年、同イベントに赴いている筆者が最新動向をレポートする。

IIJ モバイルサービス事業本部 MVNO 事業部
コーディネーションディレクター (戦略・渉外担当)

佐々木 太志



MWCの会場「フィラ・バルセロナ・グランヴィア」。巨大な展示場に世界各国から業界関係者が集結する。

オフラインでつながる意味

MWCは、以前はMobile World Congressと呼ばれ、最近ではその略称が正式名称となった、GSMA（移动通信業界の業界団体）が主催している一連のイベントです。なかでもMWCバルセロナ（以下「MWC」）はこのMWCバルセロナを指す）は、前身のイベントの時代を含めると三〇年以上にわたって開催されているGSMAのフラッグシップイベントで、近年では移动通信業界関係者一〇万人以上が参加する巨大な展示会としてよく知られています。会場は、地中海沿岸の人気の観光地、スペイン・カタルーニャ地方の主要都市バルセロナで、二〇〇六年にそれまでのフランス・カンヌから開催地の座を継承して以降、コロナ・パンデミック時の二〇二〇年を除いて、毎年イベントを開催し続けています。

参加者にとってMWCは、代替の効かないイベントです。会場内のステージでは華やかにショーアップされた業界トップによる基調講演をはじめ、アワードの授賞式、パネルディスカッション、セミナーなどが連日開催されます。巨大な展示会スペースでは、世界中から集まったベンダ、通信事業者、メーカー、スタートアップなどのブースがひしめ

き合います。会場のあちこちに設置されたミーティングルームでは、寸暇を惜しんでさまざまなレベルのビジネスミーティングが行なわれ、会場の内外を問わず、参加者同士が旧交を温め合った、情報を交換する姿も見られます。

コロナ禍を経てオンラインでいつでも世界中とつながることができた時代が到来したとはいえ、物理的にひとつの場所に集まって、話をしながらビジネスを進めることの重要性が失われたわけではなく、むしろオンラインの隆盛に対しバランスをとるかのようにより、オフラインのつながりの意味が増しているようにも感じます。

IIJは二〇二五年に初めてMWCに参加しました。当時は、法人向けにスタートしたMVNO事業が、個人向けモバイルサービス「Umo」の発足にともない一気に利用者を伸ばしていた時期でした。モバイルの使われ方が時代とともに多様化していくなか、最新技術のトレンドを学んでビジネスを成長させていくことが重要だという理由からMWCの視察に人を派遣することになりました。その一員にたまたま筆者も選ばれ、このイベントに魅せられ、それ以来パンデミックの期間を除いて欠かさず参加しています。特に二〇一八年のフルMVNOの開始以降、

営業チームの海外企業への営業活動も活発になりましたが、筆者は引き続きベンダやサプライヤーとのリレーションの確立、ブース展示やセミナー参加などによる最新技術・業界トレンドの把握をミッションとしています。

AIの行く末

今年のMWCの一番のトピックは、昨年に続き「AI」でした。AIは一昨年、大規模言語モデル（LLM）を採用した生成AIの「ChatGPT」が空前のレベルで話題となって以後、さまざまな業界で生成AIのビジネス活用が議論されています。通信業界では、ChatGPTが登場するはるか以前から、個別の技術領域でAIを活用する動きが見られましたが、生成AIの登場後はその動きがより加速し、例えば、移动通信のインフラストラクチャの運用（オペレーションレイヤ）、移动通信ビジネスの高度化（ビジネスレイヤ）、AIアプリケーションへの計算資源の提供（アプリケーションレイヤ）など、各レイヤにおいて広範な利活用のあり方が試行されています。MWCの会場で展示されていた最新型スマートフォンも多くもAI機能搭載をアピールしており、世界中のベンダやメーカーがAI時

代の覇権を狙って、新しい取り組みを披露していたと言えます。

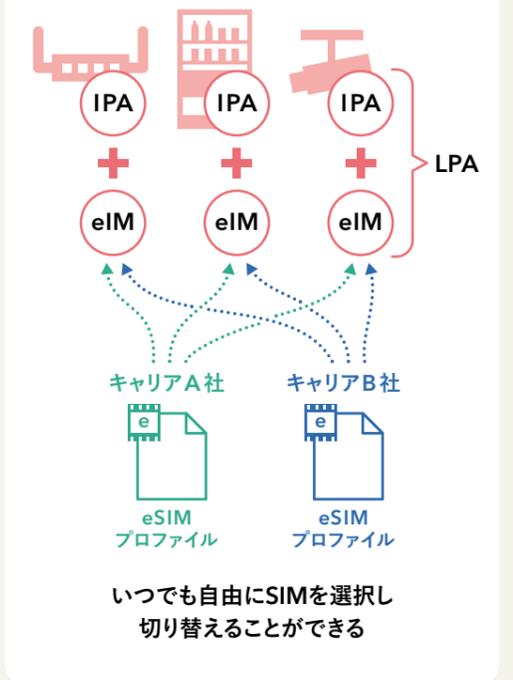
今回のMWCでのAI関連の展示で注目を集めていたのは、オペレーションレイヤではAIRANでした。RAN（Radio Access Network＝無線アクセス網）は、移动通信事業者の重要なインフラストラクチャですが、近年では仮想化・オープン化が進みつつあり、AIによるオペレーション最適化との相性が良くなっていると言えます。ビジネスレイヤでは、多くのBS（Business Support System＝通信事業者のバックヤードのシステムで、契約者管理、ロジスティクス業務、ビジネスの可視化などを担う）ベンダが、AIの活用による利用者の満足度向上やチャーン率の抑制を訴求していました。アプリケーションレイヤに関しては、スマートフォン内のNPU（Neural Processing Unit＝AIの学習・推論処理に特化した演算ユニット）では必ずしも性能が十分でない場合、ネットワーク側に置かれたNPUの余剰の計算能力を提供するクラウド型・ハイブリッド型のAIアプリケーションのデモが展示されていました。

しかし、このような動きの裏を見れば、いまだAI時代の「キラアアプリケーション」の絵姿が確定しておらず、複

IoT向け eSIM「SGP.32」の特徴



SGP.32のIoTモデル



数の可能性が同時並行的に追求されつつ、巨額のAI投資を正当化する意味でも、アピールし続けなければならぬ現状があるように感じられました。

AIは今後、キラーアプリケーションに発展・包含されて一要素技術として見なされることはなくなるのか、あるいは(過去のMWCでもあったようにバズワードとして)忘れ去られて消えていくのか……これから数年間のMWCで示されることになるでしょう。

IoT向け eSIM「SGP.32」

ここからは、我々の本業であるコネ

クティビティに関連するeSIMの最新トレンドを一つご紹介します。

もともとeSIMの規格は、M2M向けのSGP.01/02と、コンシューマデバイス向けのSGP.21/22の二本立てで開発されてきました。コンシューマデバイス向けeSIMが曲がりなりにも順調に普及するなか、技術標準化では先行していたはずのM2M向けeSIMの普及は非常に低調でした。しかしここに来て、コンシューマデバイス向けeSIMの要素技術を取り入れた、IoT機器向けeSIMの規格である「SGP.32」が巻き返しを図ろうとしています。SGP.32は、最初の規格策定を終えて、二〇二

三年五月にGSMAから公開されましたが、それから二年近くが経過し、ようやく商用サービスへの導入が見え始めてきました。

SGP.32の特徴は、先行のSGP.01/02に対し、eSIM導入時のイニシアティブを利用者側に持たせたところにあります。これについて少し説明しますと、eSIMの導入において利用者がイニシアティブを持つと、利用者の端末にカメラなどユーザーインタフェース(UI)や、eSIMプロファイルのダウンロードを司るソフトウェアの実装が要求されます。しかしスマートフォンとは異なり、操作画面のないM2Mデバイス

の需要増に乗じたコスト削減効果を享受できず、相対的に高コストになっていたことも、M2M向けeSIMの普及が進まなかった要因の一つでした。

そこでSGP.32では、普及が十分に進んだコンシューマデバイス向けSGP.21/22のアーキテクチャをもとに、端末に実装され大きなリソースを必要とするLPA (Local Profile Manager = eSIMをダウンロードする専用ソフトウェア)を、ダウンロードすべきeSIMプロファイルを選択するeIM (eSIM IoT remote Manager)と、ダウンロードのみに特化した軽量のIPA (IoT Profile Assistant)に分離し、eIMをIoTデバイス外に置くことにしました。これにより、端末メーカーや利用者が通信事業者に囲い込まれることなく、希望のeSIMプロファイルをIoTデバイスに低コストでダウンロードできるようになります。

IPAでは、SGP.32に関する実証実験を進めており、今回のMWCでもSGP.32関連の技術を提供する多くの事業者と今後のコラボレーションに向けた意見交換を行いました。IoT/M2Mにおけるゲームチェンジャーとも言えるSGP.32に引き続き注目していきたいと思えます。

MWCにおける日本のプレゼンス

MWCの会場である「フィラ・バルセロナ・グランヴィア」は、日本最大の東京ビッグサイトの約二倍のスペースを有する巨大な展示会場です。MWCの期間中、ここには世界各国から業界関係者が集結しますが、日本人としては、やはり日本企業のプレゼンスが気になるところです。今回も昨年引き続き、NTTドコモ、KDDI、楽天のMNO三社が多くの人で賑わう区画にブースを出展していました。また、富士通、アンリツ、村田製作所などグローバルに事業展開している企業に加え、スタートアップの集まるホール8でも日本発のスタートアップのブースをいくつも見かけました。

近年は総務省による出展支援プログラムに後押しされて、日本企業がより容易にMWCに出展できるようになっています。通信業界のダイナミズムを肌で感じ、五年・一〇年先のビジネスに夢を馳せるうえでもMWCは最高の舞台と言えるでしょう。このところの国際紛争や円安の影響もあって、遠い国となつてしまったスペインですが、これからも多くの日本人がMWCに参加・活躍することを期待しています。



MWCの期間中、多数の展示会に加え、パネルディスカッション、セミナー、商談などが連日繰り広げられる。

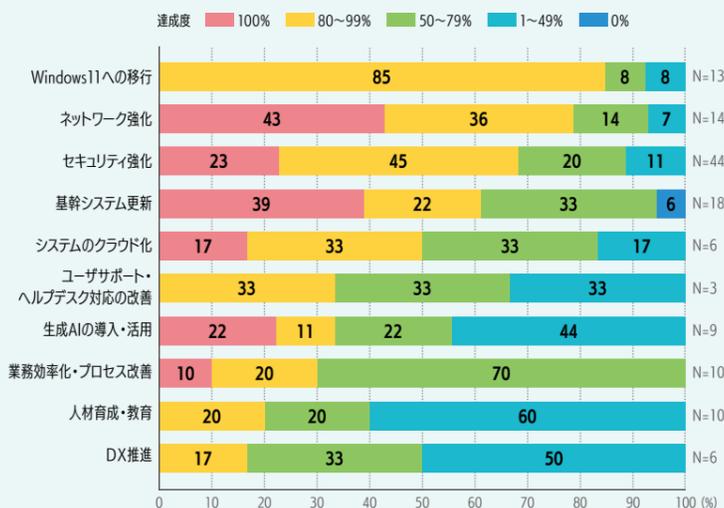
アンケート 2024年、情シスの皆さんが 「頑張ったこと」

2023年に引き続き、情報システム部門の皆さまの頑張りを広くご紹介すべく「情シス頑張ったことアンケート」を実施しました。今回はその集計結果をダイジェストでお伝えします。

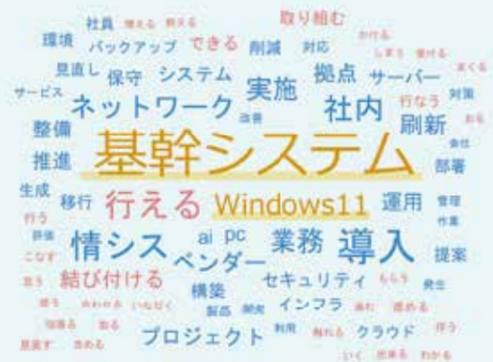
(実施期間：2024年12月5日～12月13日 / 有効回答数：191件)

Q1. 2024年の目標・KPIの達成度合いを教えてください。

※「特に多かった回答 TOP10」について、その達成度合いを表しています。



Q2. 2024年、情シスとして「これは頑張った!」と思える取り組み、活動を教えてください。



※ユーザーローカル テキストマイニングツール (https://textmining.userlocal.jp/) による分析

今回は「基幹システムの更改」や「Windows 11への移行」などについて、高い達成度が目立った。

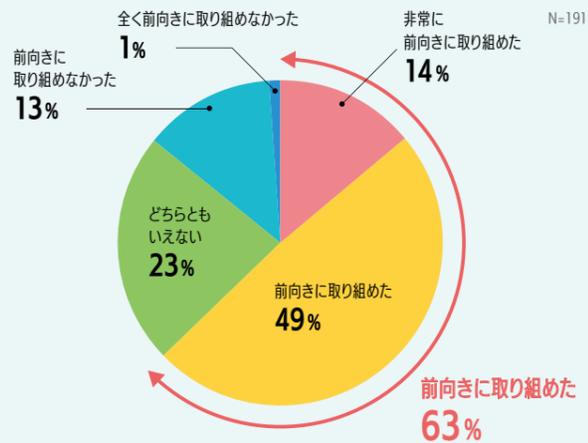
- 基幹システムの移行に合わせて、LAN や Active Directory の導入を同時並行で行なった。
- Windows 11への入れ替えと同時に Intune の導入を考えた。PoCを実施し、現在のマスクローニング方式で行なっている内容の8~9割は実現できるところまで実証できた。結局、Intuneは高価なため、導入は見送られたが、クローニングとは別の手段も取れるというバックアッププランが確立できたことは、会社からも評価してもらえた。
- 月曜日の朝、「ネットワークトラフィックの渋滞のためメールが見れない」「基幹システムが登録できない・固まる問題」を通信網の契約見直しで解決し、コストも削減できた。

Q3. 2024年、「ここは失敗した」「惜しかった」と思える取り組み、活動を教えてください。

- リモートワークが主流になり、社内ネットワークとセキュリティ対策が陳腐化しており、最新のサイバー攻撃に対応できていない。そのため、刷新を進めたいが、必要な対策や対応範囲が不明確だったり、選択肢が多すぎて決定できない。前提知識が不足しており、各対応策の重要度や優先順位が定まらず、最終的には予算とベンダの提案に依存している。
- 生成AIを活用したチャットボット導入プロジェクトを行なったが、社内の協力が得られず、成果をあげることなく終わってしまった。
- ネットワークトラブルがたまに発生するが、対応が後手後手になり、時間がかかる。インフラを強化すべきだった。
- 生産管理システム刷新にともなう周辺システムとの連携部分の開発が大幅に遅れた。
- ITに疎い役員の指示の軌道修正。新しいWMSパッケージの導入。
- Windows 11 / 24H2 の導入を止められなかった。新品のPCで他のバージョンを選べないのは厳しい。
- 社内規程を改訂する計画を立てていたが、関係部門とのあいだにいろいろな制約があり、計画が頓挫したこと。

「失敗した取り組み」としては、「頑張った取り組み」の質問でも目立った、基幹システムの刷新に苦労したという声が寄せられた。また、生成AIなどの新しい技術の導入失敗など、スキルが必要となる技術の社内展開に関する苦労もうかがえた。社内に関する不満では、情シスへの相談なしに自部門の都合を優先した結果、脆弱性をさらした事例や、保守運用や導入ハードルを考慮していない要求をされた事例が散見された。

Q4. 2024年は業務にどのくらい前向きに取り組めましたか?



業務に「前向きに取り組めた」理由

- 情シス担当者が一人なので、無理にでも前向きな思考でないと、業務を遂行できない。
- 「DX」に関して、自分の想いを全面に打ち出し、外部コンサルに「壁打ち」をしながら戦略をまとめあげて公表し、その内容を会社の中期経営計画、統合報告書に盛り込むことができた。
- プロジェクトマネージャーとして電子カルテ導入プロジェクトを完走できた。
- オンプレサーバからクラウドへの移行は悲願だった。
- 新しい仕組みの導入やシステムのBCP対策をスケジュールどおり実施できた。
- 生成AIに関わって楽しかった。

業務に「前向きに取り組めなかった」理由

- 会社の方針や自分の業務範囲が不明で、根本的に何を求められているのか、わからないままだった。
- 情報システム部としての仕事の大切さは認知されたが、仕事量が増えても待遇が変わらない。
- 業務に必要な情報が多過ぎて、知識習得が順調に行なえなかった。
- 予算縮小で、新規取り組みができなかった。
- トラブル対応などが多かった。
- 自分の成果が評価されていると感じられなかった。

情シス部門が業務に「前向きに取り組めた」と回答したのは約6割。回答には、さまざまな社内課題に対してDXを実現したことによる達成感がモチベーションとなったといった声が多かった。一方、広範な業務や待遇が原因で「前向きに取り組めなかった」との回答も見られた。

2020年から実施している「情シス頑張ったことアンケート」の調査結果をお届けしました。特設サイト「法人IT調査レポート」では、本稿で取り上げた項目以外にも情シス部門のリアルな声を紹介しています。ぜひこちらもご覧ください。



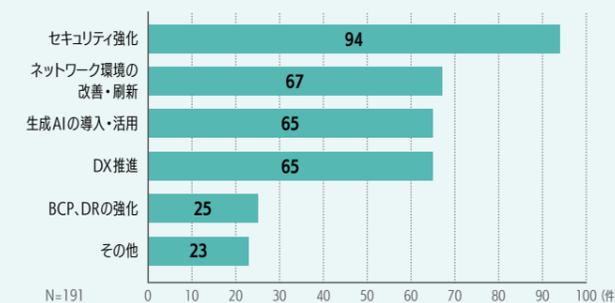
Q5. 情シス部門の今年1年を漢字1文字で表すと?

順位	漢字	理由
1位	忍	IT部門の地味な活動は理解されにくいから 本当は攻める情シスでいたいけど、耐えることが多かったから
2位	忙	毎年のことではあるが、常に人手不足&社内DXブームで仕事は増える一方なので、今年も忙しい1年だった 同時並行で取り組むべき施策や課題が多かったため
3位	耐	ヘルプデスクの立ち上げや全店舗の環境調査、BI基盤の構築など多方面で新しい取り組みが続いたが、軌道に乗せるまではひたすら耐える時間が続いたため
4位	変	1年強という移転プロジェクトで残業の日々が続き、大きく成功に貢献したと自負していたが、評価はほとんどされなかったため。見えにくい仕事は評価もされにくい現実をまざまざと見せつけられた
5位	迷	さまざまなシステムを入れ替えて社員の働く環境が大きく変わったため 会社としてDXを推進すると宣言し、会社の機運が変わったこと。それにもない、情報システム部門としても守りの情シスから攻めの情シスに変貌した 会社だけでなく、社会、世界の状況の変化があまりにも激しく、進むべき方向に迷うことが多かった 情シスのキャリアパス、AIの利用、レガシーシステムの対応など、具体化ができず、方向が見出せず、迷うことが多い

6位以下 進 難 慌 屈 減 改

前回同様、「忍耐」に関連した文字が多かった。加えて、DX需要やシステム更新の多忙さに苦しむ一方、経営陣や会社の理解・評価が得られない実態が再確認された。

Q6. 2025年に取り組みたいことを教えてください。(複数回答可)



今回は「セキュリティ強化」に取り組みたいという回答がもっとも多かった。また、一般化してきたリモートワーク環境を中心としたネットワーク環境の改善のニーズも多く見られた。一方、昨年よりは落ち着いたものの、生成AIに対する関心も依然として高かった。

IJ 情シス BOOST UP PROJECT のご紹介

「IJ 情シス Boost-up Project」は、情報システム関連部門で働く皆さまに日々の活動や組織運営のヒントとなる情報をお届けしています。

HP <https://www.ij.ad.jp/svcsol/iboost/> X @IJ_Boost

筆者は現在、二種類のセッションを主催しています。ひとつは、都内の某ライブハウスにおける月一回のソウル・ファンクセッションです。これは一般から参加者を募るオープンなスタイルで、セッション定番曲のなかから二〇曲くらい「よくやる曲」を決めておいて、あとは「〇〇をやりたいしよう！」「この曲いける？」など、その場に集まった人たちがやり取りしながら曲を決めて、即興で演奏する形式です。「一発勝負」的な感じで、もちろん緊張もしますし、途中で失敗したりもするのですが、みんなで顔を見合わせながら、なんとか曲が終わると、とても嬉しそうで、心の底から楽しんでくれているのがわかります。常連さんも結構いますし、時々プロの方も来てくださいますが、プロの方でさえ、われわれアマチュアと一緒にノリノリで楽しんでくれています。

もうひとつは、年に三回ほど開催している業界ロックンロールセッションです。こちらは、インターネット業界の仲間たち、といっても同業者、クライアント、競合もいて、若手から経営層まで参加者の幅も広いです。ソウル・ファンクセッションとはまた別の、都内の某ライブハウスを借り切ってやるのですが、事前に演奏曲と参加者を決め、誰がどのパートを担当するのかまできちんと調整します。準備に手間がかかりますが、早く進行でき、また、みんな顔見知りなので、ステージも観客席もとても盛り上がりやすいです。そして、みんながとにかく「いい顔」をしていることに毎回驚かされます。

先日、ある企業の管理職のヴォーカリストさんが「実は今トラブってて、対策会議を部下に任せて抜けてきた。終っているみなごとでも生き生きと楽しそうなのは、セッションがまさにそのマインドフルな状態を自然に引き出してくれるからではないだろうか？」ということでした。

セッションでの演奏は、何度も練習で合わせてからやるのではなく、曲をその場で決めても、あらかじめ決めておいても、基本的には初めて合わせていくものです。すると、自然に他のプレーヤーの音を注意深く聴きながら、臨機応変に音を出していく、つまり「今ココ」に集中し、自分が何をすべきか即座に判断・反応することを繰り返していく必要があるのです。ほんの数分ではありますが、過去や未来のことなど考えている余裕はなく、ひたすら、どんな音、どんなリズム、誰が今何を弾いている、そこで自分が何をやるか……ただ、その瞬間に集中しているのです。すると、不思議とだんだん「自分」という感覚が薄れ、「どう見られているか」「うまくやれているか」といった評価基準からも離れて、音楽そのものの流れに身を委ねるような状態になっていきます。集中しているのに、緊張していない。むしろどこか自由で、心地よい、そんな時間を過ごしているのではないかと思うのです。これがセッションがとても楽しく、毎回大いに盛り上がる秘密なのではないでしょうか？ セッションとは、つまりマインドフルネスになるための一つの儀式なのかもしれません。

忘れかけている「今ココ」

現代社会では、コミュニケーションがどんどん「非同期」になっていることも、セッションが楽しい理由かもしれません。メール、チャット、SNSは、いつでも・どこでもやり取りできる反面、即時性やその場を共有する感

人と空気とインターネット

予定調和はつまらない？

IIJ 非常勤顧問
株式会社パロンゴ監査役、その他 ICT 関連企業のアドバイザー等を兼務

浅羽 登志也

わつたら戻らないといけないので、出番を早めてほしい」と頼まれました。それなら「次、お願いします！」と、すぐステージに立つてもらおうやいなや、オジー・オズボーンの激しいナンバーを力一杯シャウトして、「ああ、スツキリした」と、穏やかな笑みを浮かべて会社へ戻って行かれました。それは、どこか禅僧が悟りを得た時のような表情にも見えませんでした。

それにしてもセッションが、なぜこれほど楽しく、人を開放する力を持っているのでしょうか？ 現代社会を生きる我々は気がつけば、いつも何かに追われています。次の予定、次のメール、次のニュース……といった具合に、目の前にあることよりも、少し先にある「なにか」にいつも心が引きずられています。スマートフォンのお知らせに反応し、そのたびに画面を開き、指がいくつものアプリを横断していくけれど、そこに自分の意思が働いているとは言い難い。まるで「いつもうわの空で生きている」ようだといった言い過ぎでしょうか？ そんな日常にあつて、「今ココにいる」という言葉がやけにまぶしく見えることがあります。自分の心が「今ココに集中している」状態であることを「マインドフルネス」と言います。特にここ数年、この考え方が静かなブームのように浸透してきているように感じます。マインドフルであるとは、単なる癒しやストレス対策とは異なり、我々の意識のあり方そのものを問い直す、とも言えると思いますが、意識的に自分をこの状態に持つていくのはなかなか困難かもしれません。

マインドフルネスな儀式

そこで、最近ふと気がついたのは、セッションに参加し覚が知らず知らずのうちに失われているのではないのでしょうか。最近はやたらとコンプライアンスが強調されるので、先行きが不透明なまま、ドキドキしながら何かを進めていく機会が少なくなっているのかもしれない。何事もなく、予定調和的に、いかに穏便に物事を進めるかといったことばかりに気を遣い、そこから外れると誰かに怒られるのではないかと、いつもビクビクと怯えている。我々はそのような生活に少し疲れているのではないのでしょうか？

セッションは、それとは真逆です。その場にたまたま居合わせた人同士が、一回きりの「遊び」に真剣に熱中する。何が起ころうとも、お互い様。曲が進むに任せて、フェイス・トゥ・フェイスでコミュニケーションをとりながら、その時限りのリアルタイムな活動を楽しむ。そこには普段、忘れかけている豊かな「今ココ」があるように思います。

近年 AI の進歩が著しく、ビジネスや日々の生活でいかに便利に活用するかを競い合っているような状況です。人間と比べて桁外れの情報を処理し、はるかに素速く、優れた判断を下すことができる AI をさまざまな面で活用すれば、便利で安全な社会を構築できる。そんな未来に向かっているように思います。それはそれで好ましいことかもしれませんが、それだけだとなんだかつまらない気がします。

これからは筆者が主催しているセッションのように、予定調和的ではない、リアルタイムのコラボレーションにより、新しいものを生み出していく活動を、いかに社会のなかに実装していくかがポイントになりそうな気がします。さまざまな「セッション」が、社会の至るところに芽吹いていく——そんな未来を、我々自身の手で「奏でて」いきたいものです。

慌ただしい日常のなか、我々は「今ココ」という感覚を

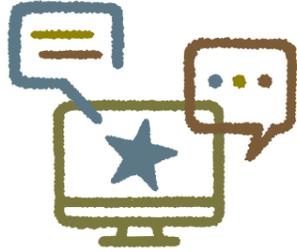
忘れかけているのではないだろうか？

今回は、筆者が主催するライブ・セッションで得た体験を述べてみたい。



通信の自由化 40周年

IIJ 広報部 技術統括部長
堂前 清隆



日本では電話やインターネットなど、さまざまな通信サービスが利用されていますが、これらは民間企業が事業として提供しています。こうした事業を行なう会社を、法律上「電気通信事業者」と言います。

現在、日本には2万5000を超える電気通信事業者が存在しますが、電気通信事業者の歴史は意外と浅く、1985年4月に施行された「電気通信事業法」によって誕生しました。それから40年で、日本の電気通信事業は飛躍的な発展を遂げました。

もちろん電気を使って音声を伝える「電話」や、より原始的な電気通信である「電信」は、それ以前から使われていました。日本における最初の電気通信は1869(明治2)年に始まりました。これは明治政府による官営の事業であり、これ以降、第二次世界大戦後まで、電話や電信は国と国が設立した特別な企業体(電電公社、国際電電)が独占的に提供してきました。電気通信が民間に開放されたのは1985年で、この出来事を「通信の自由化」と呼んでいます。

通信の自由化により、DDI(第二電電)、日本テレコム、日本高速通信といった会社が通信事業に参入しました。これらの会社は「新電電」「NCC(New Common Carrier)」と呼ばれます。NCC、電電公社を民営化したNTT(日本電信電話)、そして続々と参入した数多くの企業が、今日に至る日本の「電気通信業界」を形作ることとなりました。

電気通信事業者というと、各地に建物(局舎)を有し、光ファイバや電線などの通信回線を張り巡らせているイメージを持たれるかもしれません。そういった「電気通信回線設備」を設置することも電気通信事業の一部ではありますが、他の電気通信事業者の設備を利用して電気通信事業を営むことも可能です。ちなみに、1985年の制度開始時には、電気通信回線設備を保有する事

業者を「第一種電気通信事業者」と呼び、それ以外の事業者は「第二種電気通信事業者」として区別していました。ですが、2004年4月の制度改正にともない、この分類はなくなり、現在は事業規模に応じて、総務省による審査がある「登録電気通信事業者」と、それ以外の「届出電気通信事業者」に分かれています。

ところで、今では多くの会社や個人がインターネットを利用して、ネットサービスを開発・提供していますが、意外なところで電気通信事業者の登録・届出が必要になる場合があります。

例えば、ネットサービスを提供する画面に広告やアフィリエイトのリンクを掲載し、利益を得ようとする、「電気通信事業を営む者」として、電気通信事業法の規律の対象(法律の規制を受ける)ことがあります。この場合でも、直ちに届出や登録が必要になるわけではありませんが、そのサービスに会員登録機能を設け、会員間でのダイレクトメッセージの機能を付けると、「他人の通信を媒介している」とされ、電気通信事業者として登録・届出が必要になる場合があります。また、このような規定は企業だけでなく、個人にも適用されることも注意が必要です。

どのようなパターンで電気通信事業法の規律対象となるのか、登録・届出が必要なのかについては、電気通信事業を主管する総務省のWEBサイトに「電気通信事業者参入マニュアル[追補版]」「電気通信事業参入マニュアル(追補版)ガイドブック」という資料が掲載されており、詳しく解説されています。

こうした資料が用意されているのは、1985年の「通信の自由化」の趣旨を踏まえて、多くの人・企業が電気通信事業に参入できるようにするための環境作りの一環と考えられます。新しい事業者の参入により、日本の電気通信がますます発展することを期待しています。

社員が作るIIJの行動指針「私たちのバックボーン」

IIJ 執行役員 経営戦略本部 サステナビリティ委員会 事務局長
川上 かをり



この「サステナ・レポート」では、IIJのサステナブルな未来に向けた活動にチャレンジしていたり、プロジェクトでイニシアティブを発揮している社員を紹介します。初回は、IIJの社員行動規範「私たちのバックボーン」の作成プロジェクトに参加した熊澤和希(くまざわ・かずき)さんです。



IIJ エンタープライズ営業本部
第一事業部 第二営業部
営業3課長
熊澤 和希

——「私たちのバックボーン」の概要と、策定プロジェクトに参加したキッカケを教えてください。

熊澤: IIJには素晴らしい経営理念があるのですが、表現が高尚で、日々の仕事に落とし込んでいくのがむずかしいため、わかりやすい言葉で日常業務に結び付くような credo(行動指針) を作ることになりました。そのプロジェクトで参加メンバーを募っていたので、応募しました。自分で会社に影響を与えられるようなものを作るのが楽しそうだなと思ったのと、credoにも興味がありました。

——会社が決めるのではなく、社員自らが行動指針を作るというのがIIJらしいですね。

熊澤: トップダウンで決めたものにくらべて、社員みんなで作ったことで、当事者意識が持ちやすくなったと感じています。全社アンケートを何回か実施し、参加型で作れたことも良かったです。

——プロジェクトに参加して、楽しかったことや「気づき」はありましたか?

熊澤: 広報、営業、エンジニアなど、多様な部署のメンバーがいましたが、根底にある信条は「AS2497のプライド*」みたいに、共通しています。一方、個々の仕事が違うので、言葉の認識にズレがあったりして、逆にそのギャップが面白かったです。最終的に5つのワードになったのですが、仕事は違っても思いは同じなんだな、という気づきがありました。

——メンバー間に認識のギャップがあったというのは

多様性の点からも興味深いですね。5つの行動指針のなかで、熊澤さんが一番気に入っているのはどれですか。
熊澤: 5番目の「尊重」です。気に入っているというか、作るのが一番大変だったので思い入れがあります。多様な仲間がそれぞれの強みを活かして、さまざまな角度から物事を議論できる組織をつくるのが重要だという主旨で、サステナビリティにも重なると思います。
——この指針が浸透していくことで、IIJの社風や文化が継承されていくといいですね。

*インターネットを構成する個々の独立したネットワーク(AS:自律システム)に対してAS番号が割り振られており、IIJは国内初のISPとして、もっとも早い番号(2497)を保有している。

私たちのバックボーン

1. チャレンジ...「実現する!」を前提にした行動を
2. 好奇心...「気になる!」だけでは終わらせない
3. 情熱...「面白い!」を極めることが、プロフェッショナルへの道
4. 責任感...「これでいいだろう」で妥協しない
5. 尊重...「どういう事だろう?」と感じた時こそ、耳を傾ける

https://www.ij.ad.jp/company/about/our_backbone/

IIJセキュアMXサービスにおける お客さま情報の漏えいについてのお詫びとご報告

このたび、弊社法人向けメールセキュリティサービス「IIJセキュアMXサービス」におきまして、お客さま情報の一部が外部に漏えいしていることが確認されました。対象となるお客さまには弊社担当者よりご案内しておりますが、日頃よりIIJ.newsをお読みいただいている読者の皆さまにもご心配をおかけすることとなり、深くお詫び申し上げます。

情報漏えいに関する詳細はプレスリリースに掲載しております。
<https://www.ij.ad.jp/news/pressrelease/2025/0422-2.html>

ご利用中のお客さま、および関係者の皆さまには多大なご迷惑をおかけし、誠に申し訳ございません。あらためて深くお詫び申し上げます。

今後の対応につきましては、現在、再発防止に向けて、セキュリティ対策および監視体制の強化について検討を進めております。また引き続き、関係機関と連携して対応を行なってまいります。

コラム vol.5
車いすフェンシング
笹島貴明の
――J 広報部 笹島貴明
初の個人メダル獲得

オリンピックやパラリンピックがメイ
ンイベントになるスポーツでは、選考レ
ス期間の大会がレベルの高い大会となり
ます。特に世界選手権は通常の国際大会
よりも獲得ポイントが約二倍になるうえ
に、人数制限が少ないため出場選手が多
くなり、メダル獲得の難度はオリ・パラ本
大会よりも高いと言われることもありま
す。現在、車いすフェンシングにおいて
パリ・パラリンピックが終わって選考レ
ースまでの合間の期間ということもあり、
ほぼ隔月で国際大会が開催されているも
の、パラリンピックでも上位を独占し
た中国チームが出場していないなど、や
や落ち着いた時期と言えます。

さて、三月にイタリアのピサでワール
ドカップが開催されました。ワールドカ
ップは地域別に持ち回りで開催されてい
ますが、用具の輸送や障害者向けの設備
の問題から、ほぼ決まった都市での開催
となっています。筆者もピサで試合をす
るのはすでに七回目で、実家よりも高頻

度で訪れていることもありました(笑)。
今回は選考期間外で、トップ選手が勢
揃いしているわけではないですが、ヨーロ
ッパでの開催ということでイタリアを中
心に有力選手が集まる大会となりました。
個人的にも障害力テゴリーが変わって初
の国際大会となり、気合を入れていまし
た。「エペ」という種目ではベスト16で負
けてしまったのですが、「フルール」とい
う種目では準決勝まで進出し、ウクライ
ナの選手に負けたものの、銅メダルを獲
得できました！これまで地域別の大会
や団体種目でメダルを獲得したことはあ
りましたが、今回、個人種目で初のメダル
獲得となりました。

今年九月に韓国で世界選手権も控え
ており、今後の大会でもメダル獲得を目
標に頑張っていきますので、引き続き応
援をよろしくお願いいたします。



表彰式の模様(右端が筆者)

株式会社 インターネットイニシアティブ

本社 東京都千代田区富士見 2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
〒102-0071 TEL: 03-5205-4466

関西支社 大阪府大阪市中央区北浜 4-7-28
住友ビルディング第二号館 5F
〒541-0041 TEL: 06-7638-1400

名古屋支社 愛知県名古屋市中村区名駅南 1-24-30
名古屋三井ビルディング本館 4F
〒450-0003 TEL: 052-589-5011

九州支社 福岡県福岡市博多区冷泉町 2-1
博多紙園 M-SQUARE
〒812-0039 TEL: 092-263-8080

北海道支店 北海道札幌市中央区北四条西 4-1
伊藤・加藤ビル 5F
〒060-0004 TEL: 011-218-3311

東北支店 宮城県仙台市青葉区中央 4丁目 4-19
アーバンネット仙台中央ビル 11F
〒980-0021 TEL: 022-216-5650

横浜支店 神奈川県横浜市港北区新横浜 2-15-10
YS 新横浜ビル 8F
〒222-0033

北信越支店 富山県富山市牛島新町 5-5 タワー 111 10F
〒930-0856 TEL: 076-443-2605

中四国支店 広島県広島市南区松原町 2-62 広島 JP ビルディング 16F
〒732-0822 TEL: 082-568-2080

沖縄支店 沖縄県那覇市久茂地 1-7-1 琉球リース総合ビル 2F
〒900-0015 TEL: 098-941-0033

新潟営業所 新潟県新潟市中央区南笹口 1-1-54 日生南笹口ビル 7F
〒950-0912 TEL: 025-244-8060

豊田営業所 愛知県豊田市西町 4-25-13 フジカケ鐵鋼ビル 5F
〒471-0025 TEL: 0565-36-4985

IIJグループ／連結子会社

株式会社 IIJ エンジンリング
東京都千代田区神田須田町 1-23-1 住友不動産神田ビル 2号館 15F
〒101-0041 TEL: 03-5205-4000

株式会社 IIJ グローバルソリューションズ
東京都千代田区富士見 2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
〒102-0071 TEL: 03-6777-5700

株式会社 IIJ プロテック
東京都千代田区富士見 2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
〒102-0071 TEL: 03-5205-6766

株式会社 トラストネットワークス
東京都千代田区富士見 2-10-2 飯田橋グラン・ブルーム
〒102-0071 TEL: 03-5205-6490

ネットチャート株式会社
神奈川県横浜市港北区新横浜 2-15-10 YS 新横浜ビル 8F
〒222-0033 TEL: 045-476-1411

IIJ America Inc.
55 East 59th Street, Suite 18C, New York, NY 10022, USA
TEL: +1-212-440-8080

IIJ Europe Limited
1st Floor 80 Cheapside London EC2V 6EE, U.K.
TEL: +44-0-20-7072-2700

IIJ Global Solutions Singapore Pte. Ltd.
160 Paya Lebar Road #03-07 Orion @ Paya Lebar Singapore 409022
TEL: +65-6773-6903

PTC SYSTEM (S) PTE LTD
10 Kallang Avenue #07-12 Aperia Singapore 339510
TEL: +65-6282-0255

艾杰(上海)通信技術有限公司
邮编 200031 上海市徐匯区淮海中路 1045号淮海國際広場 4202-4203室
TEL: +86-21-8026-1899

この冊子の内容はサービス形態・価格など予告なしに変更することがあります。(2025年5月作成)

※ 表示価格には、消費税は含まれておりません。

※ 記載されている企業名あるいは製品名は、一般に各社の登録商標または商標です。

※ 本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部について、著作権者からの許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で複製、翻案、公衆送信等することは禁じられています。

©Internet Initiative Japan Inc. All rights reserved.
IIJ-MKTG001-0188

発行
株式会社 インターネットイニシアティブ
広報部

お問い合わせ
株式会社 インターネットイニシアティブ
広報部内「IIJ.news」編集部
〒102-0071 東京都千代田区富士見 2-10-2
飯田橋グラン・ブルーム
TEL: 03-5205-6310
E-mail: ijnews-info@ij.ad.jp

編集
村田茉莉、増田倫子、笹島貴明、中島優

編集協力
合同会社 Passacaglia

表紙イラスト
末房志野
デザイン
榊原健祐、榊原史海 (Iroha Design)

印刷
株式会社 興陽館 印刷事業部

表紙の言葉

6月は古来、稲作のために田んぼに水を注ぎ入れる季節。重なり合うように豊かに交わる水の流れが、水田をやさしく潤します。自然の恵みと、それを支える人々の知恵と努力に感謝しながら、今年も美味しいお米が実ることを願って――そんな思いを込めました。

末房志野

◎IIJ.news 表紙のデザインを壁紙としてダウンロードいただけます。ぜひご利用ください。

URL: <https://www.ij.ad.jp/news/ijnews/wp/>

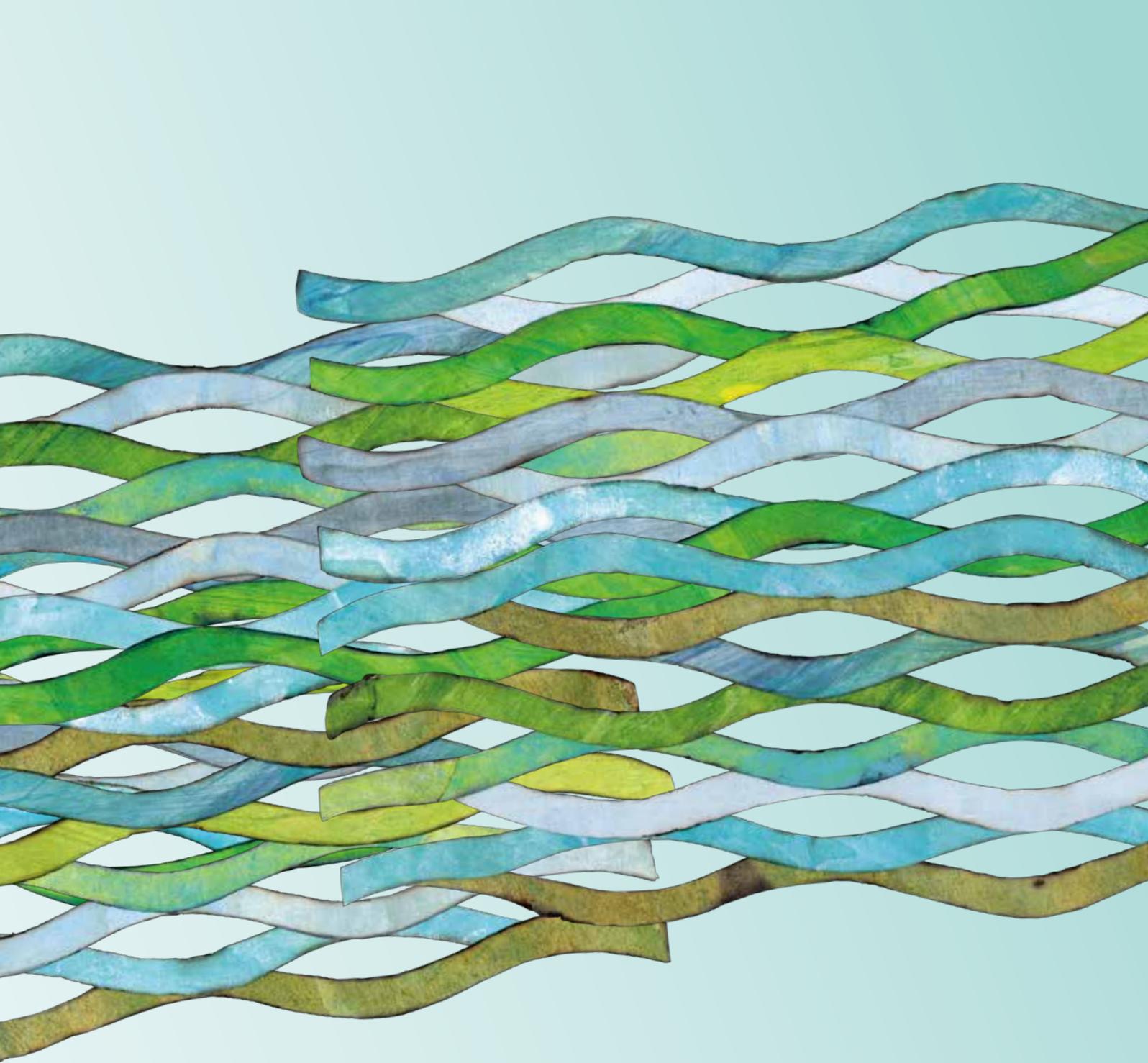
◎IIJ.news のバックナンバーをご覧ください。

URL: <https://www.ij.ad.jp/ijnews/>



編集後記

上映中に規定のアプリで投票を行ない、投票結果によって内容が変化するというインタラクティブ映画を見に行きました。視聴者からの電話の集計でフィルムを差し替えて結末を変えるドラマや、Netflixの機能を利用してゲームのように展開が分岐するテレビ作品はありましたが、劇場で鑑賞する映画では日本初とのこと。映画館で投票するという行為自体もシンプルながら楽しく、48パターンもある分岐のコレクション要素も相まって、映画館ならではのエンターテインメント性が一歩進んだような気がしました。(S) / 春は出会いの季節と言いますが、今年は、大学時代の友人らと10年ぶりに集まったり、奈良に移住した高校時代の親友の家を15年ぶりに訪れるなど、「再会」の機会に恵まれました。楽しかったのは言うまでもないですが、今でこそ笑って話せるようになった当時のコンプレックスを褒められ、20年越しに自分の大きな思い違いに気づかされました。「なんであの時、自分はそんなことを思ったのだろう。でも、そうでなければ今の自分はいなかったのかな」といった具合に、少々、心がざわつく今日この頃です。(M) / 素敵という言葉の語源が気になりました。なぜ「敵」という漢字を使うのか。昔は素的が多く使われたとか。明確な理由は残っていないようですが、いくつかのうち「ぜいたくは素敵だ」「大胆素敵」といった言葉遊びの名残という説が粹に感じました。(Y) / 先日、ニッポン放送で「彬子女王のオールナイトニッポン Premium」が放送されました。プリンセスの日常が面白すぎると著書が話題になっていたあの彬子さま。パーソナリティが素のまま、本音を語るラジオが好きで、毎日いろんな番組を聞いていますが、さすがオールナイトニッポン! 最高に面白かったです。1年間限定で、ポッドキャストで配信中です。(T)



IIJ

Internet Initiative Japan